

からは更に装いを新たに於て、活版によつて公刊することになった。鎌倉時代語研究会は、又、昭和五十二年以来、色葉字類抄を中心とする当代の語彙蒐集をも続けて来ている。幸い、先般文部省科学研究費を拝受する機に恵まれて、その成果の一端を別に発表し、更に広く多くの諸賢の御誘掖を仰ぐべく力めても来た。鎌倉時代語の研究に至る入口は、種々あるであろう。われらのこの歩みは、基礎作業を志向しつつ行つ、その僅かな一つの、試みの集いに過ぎない。しかし小さな一つ一つの積重ねこそ、斯の道には必要であろう。本誌が、新しい分野を開拓するための、土壌作りの役に立つことを秘かに念じ、且つ、多くの他の入口よりする研究が様々に現れ、実ることを期待するところである。

昭和五十六年三月

小林芳規

目次

巻頭言

石山寺蔵の片仮名交り文の諸資料について	小林芳規	一
高山寺蔵『四卷抄聞書』について	柳田征司	三
「フッキ(富貴)」をめぐつて	沼本克明	四
古文書・古往来における「請」について	三保忠夫	六
院政・鎌倉時代に於ける「類同・例示」等の表現法	佐々木峻	八
否定辞「無」を冠する漢語の音と意味	来田隆	九
——「無礼」の音の変遷をめぐつて——		
古鈔本宝物集の文章構成とその文体	菅原範夫	二九
——最明寺本と書陵部本巻四部分を中心にして——		
広島大学文学部 国語学研究室蔵 医心方卷第七影印並に積文	松本光隆	三五
影印		三六
積文		三六

栄花物語語彙索引稿(一)	高知大学人文学部国語史研究会	一七
卷 二	二〇一	
卷 三	二六三	
蓮如上人「歎異抄」総索引(一)——漢字索引——	金子 彰	三五
書写本		
新潟大学教育学部長岡分校鎌倉時代語研究会		
会員近著紹介	三〇	
鎌倉時代語研究集会記録	三〇	
「鎌倉時代語研究」(第一輯~第三輯) 目次	三四	
彙 報	三五	
後 記	三六	

石山寺蔵の片仮名交り文の諸資料について

小林 芳 規

目 次

- 一、片仮名交り文使用の基盤
- 二、院政期の片仮名交り文
- 三、鎌倉時代の片仮名交り文
- 四、石山寺蔵の片仮名交り文の国語資料としての性格
- 五、石山寺蔵片仮名交り文所用文献一覧

一、片仮名交り文使用の基盤

片仮名交り文の起源については、春日政治博士の高説があり、著名である⁽¹⁾。それによれば、既に平安初期の訓点資料において、注解を傍記したり、或いは本文の訓法を本文に離れて別に書いたりしたものに片仮名交り文の古例が見られるとし、西大寺本金光明最勝王經古点や飯室切金光明最勝王經註釈古点の例が挙げられ、又、独立した文献の古例として、東大寺諷誦文稿を指摘せられ、未だ甚だ不整理な初期のものとされた。更に、片仮名交り文という文体は、常に漢文に親しみ漢字を多用する僧侶・儒家が、漢文を和読するために施した訓点に発生させた片仮名を用い、その施訓の手法をそのまま取り来て、自作の文に書始めたものと説かれたのである。訓点資料の中に見られる例には他にも大乘掌珍論承和嘉祥点や観弥勒上

なつた。

正和二〔四〕を「二」に訂し、更に右傍に「二」と墨書。五月一日於二階堂奉受二位僧正御房了／金剛資榮海生年／「三巻目分内少欠」(墨消)

甲／第五十三箱／四巻抄勅 四巻

この包紙は『四巻抄』四巻の包紙であつたと見られるが、そこに記された「正和二年……」の記事が、『求聞持法等』の奥書と一致する。それによって、『求聞持法等』が『四巻抄』ではないかという目で見てみると、『四巻抄』の巻四であることが判明したのである。そして、同じ桐箱に収められた『転法輪等』が同じく巻第一であることが判明した。『転法輪等』『求聞持法等』の書名が付けられているのは、『四巻抄』の巻一・四の巻首の内容によっていたのである。そのように見ると、伝存が確認されていない僚巻、『四巻抄』巻第二・三は、その巻頭がそれぞれ「法華經法」「薬師」であるから、そのような書名で高山寺に伝存しているかも知れないが、今のところ伝存の有無を確認していない。

(9) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要特輯号3 一九七一・三)

〔付記〕 あたたかい御芳情を賜わっている高山寺の方々に心よりお礼を申し上げます。また、この拙い報告を作成するについて、高山寺典籍文書綜合調査団の方々に種々御教示いただきました。わけても小林芳規博士には細部にわたって御指導下さいました。記して謝意を表します。

「フッキ(富貴)」をめぐって

沼本克明

目次

- 一、問題の所在
- 二、「富」の字音
- 三、「フッキ」発生の契機と時期
- 四、「富貴」の音形の変遷
- 五、「早」「牛」との関係

一、問題の所在

現代漢語を総覧すると語中に促音を有する多数の漢語が存する。それ等の殆ど大部分は所謂入声に属する字が下接無声子音字と合する事に依って促音化したという日本語の音韻変化の下で説明し得るものである。然し、極僅かではあるが、そういう駆流としての音韻変化では説明出来ないものが見出される。即ち、本来入声字でないものに促音化した例が見られる。実例で示せば次の如きものである。

- キツカイ(奇怪)
- ギツンヤ(牛車)

「フッキ(富貴)」をめぐって